

日本語における文法化と節減少

加 藤 重 広
(北海道大学)

Grammaticalization and Clause Reduction in Japanese

KATO, Shigehiro
Hokkaido University

The Japanese language has long been characterized as a head-final language, but in most of its verb complexes the head precedes the complement. This study proposes that placing the head first in verb complexes and the semantics-over-morphology principle account for the grammaticalization in Japanese. In the sentence, “Hanako-wa Taro-ni at-ta koto-ga aru. (Hanako has met Taro before.),” the clause preceding koto is regarded as a subordinate clause, and koto-ga aru is the main clause in the original structure, but considering koto-ga aru as an auxiliary verb transforms the entire sentence into a simple sentence. This shows that the semantic integrity and backgrounding of noun phrases’ (NPs’) lexical meaning are principal factors in the grammaticalization of Japanese.

キーワード：日本語，単文化，文法化，異分析，節減少

Keywords: Japanese, simplexication, grammatication, metaanalysis, clause reduction

はじめに

1. 主要部後置と文法化
 2. 文法化と単文化
 3. 連体修飾節を含むタイプの機能単位
 4. 有派生タイプと一般名詞の文法化
 5. 連体修飾を含まない文法化のタイプの整理
 6. 日本語の類型的特性と文法化と非節化
- 終わりに

はじめに

本論では、日本語において新しい機能的単位が生じている現象を概観して整理し、それらの構造、また、それらにかかる種々のレベルの制約について考察するものである。機能的単位とここで単純に呼ぶものの多くは、従来の国文法で「辞」と呼ばれていたカテゴリーに所属させるべきであるが、形態論的にはいくつかの

形態素の統合によって生じた複合辞と見るべきものがあり、その文法化の度合いもさまざまである。

以下では、どのような機能的単位が形成されているのか、また、それによってどのような構造変化が生じているのかについて整理した上で、日本語の類型的特質を考えたい。

1. 主要部後置と文法化

ごく単純に統語構造を主要部と非主要部（補部）に分けて捉えるとき、日本語は主要部が右方（後方）に置かれるという強い性質を持つと言える。これは、修飾部と被修飾部では必ず維持される関係であり、これに違反する「後置」などの現象には一定の意味的制約がかかるとされている。「かなり甘い」など語彙的要素と語彙的要素の場合は、被修飾の主要部が後に置かれることが確認しやすいが、機能的な要素に関わる場合には、統一的に説明しにくいケースも生じる。

- (1) 甘くありませんでした。
- (2) 甘くなかったです。

例えば, [[[[[甘く]あり]ませ]ん]でし] た] のように、機能的な主要部を認め、最右端にあるタを主要部と想定すると、(2) の [[[[甘く] なかつ] た] です] の場合に、同じように「です」を主要部と扱うことになり、整合性を確保するために理論的操作か場合分けの説明が必要になる。本論は、この種の事象を議論するものではないが、主要部が右方にあるという原理が、形態論的なレベルと統語論的なレベルが明確に区分されないままに適用されると枠組みの整合性の上で重大な問題になりうることに、意を用いたいと思うのである。

しかも、日本語の場合、述部複合については、形式名詞などを用いて文法化するケースが多く見られる。それは形式名詞と一般名詞とで異なるのであるが、あまりその点は議論されていないようだ。

- (3) 駅がある。
- (4) 私が毎日利用している駅がある。

例えば、(4)では「私が毎日利用している」という節が「駅」を修飾しているが、構造は(3)と変わらず、「ある」という述部と「駅が」という名詞句が主節をなしている。(4)では「私が毎日利用している」という部分が関係節（連体修飾節）¹と

¹ 関係節の定義については、加藤(2010)に従い、主名詞を含まないものとする。

して「駅」を修飾する従属節になっていると分析され、(4)は複文に分類される。(3)は従属節を含まない単文であるが、いずれも同じ主節を含む構造になっている。

- (5) 骨折したことがある。

同じ考え方をすれば、(5)は「ことがある」という主節と「こと」を修飾する関係節「骨折した」からなる複文である。しかし、(4)と(5)には、以下のような違いがある。便宜上、(4)を A 型、(5)を B 型と以下では呼び分ける。

- (6) A 型は主節だけで文が成立するが、B 型は主節だけでは文は成立しない²。
 (7) A 型は主節が実質的な主節のままであるが、B 型は従属節が実質的な主節に相当する意味を担う。
 (8) B 型では、本来の主節を含むシンタグマが助動詞相当の機能を持つ。

「ことがある」は、(5)においては、「経験を示す」と説明されることがあるが、これは必ずしも正確ではなく、特定個人についての事象叙述でなければ経験とは解釈しにくい。「ことがある」が経験と解されるには、「こと」の前の述部がタ形でなければならないが、それだけでなく、スコープと構文の問題が関わる。

- (9) 太郎は、骨折したことがある。
 (10) 花子は、太郎が骨折したことがある。

例えば、(9)は太郎が「骨折する」という経験を有することを示しているが、(10)では「太郎が骨折する」というできごとを花子が経験したことを示している。また、(10)は太郎が花子の身内であるなど経験者と事象に有意な関係性があることが意味的な適格性条件として想定される。加えて、(9)と(10)はいずれも「X は、～したことがある」という形式で、X を主題とする文になっており、X が「ことがある」のスコープには入っていないという点も考慮すべき課題となる。この点は、別の機会に掘り下げて考察する。

ここで考えたいのは、主節が主節でなくなるという現象である。(5)に従属節＋主節という日本語の構造を想定したとき、「ことがある」が主節であり、それに先行する部分が従属節に相当するわけであるが、「ことがある」が助動詞だとすれば、主節は文全体であり、「骨折した」を主要部として後続部分はそれに付属

² 「こと」を「重大なこと」「深刻な事態」などの意に解釈すれば成立しやすいが、この場合も「(これは)ことだ」「(これは)ことになる」などのほうが一般的であろう。しかし、この解釈は特殊な条件下で成立するもので、決して一般的とは言えないので、ここでは解釈から除外する。

する補部と解釈される。この場合、「骨折したことがある」は単文である。しかし、「骨折した」を従属節とし、「ことがある」を主節と解釈する場合は、複文と見なすことになる。B型の場合、単文か複文かが問題になる。

「形式主義的には複文であるが、機能主義的には単文である」とする考え方もありうるが、本論はこれをとらえ方の枠組みの問題ではなく、言語それ自体の変化と考える。

2. 文法化と単文化

言語の変化と捉えるということは、意味や機能の実質性が形態に優位に作用することによって生じた文法化と考えることであって、「ことがある」が助動詞という機能的単位としての特性を確立させたと見ることでもある。「ことがある」を一種の複合辞（あるいは複合助動詞）とすれば、それが文法化の一例であることはむしろ一般的にとらえ方であるが、本論は、これが「ことがある」がみずから主節であることをやめて助動詞という機能辞になり、従属節が主節になった、という点を重く見たいのである。ここでは機能辞となることで（主）節であることを放棄することを《非節化》(declausalization)と呼ぶ³。

つまり、「ことがある」の文法化は、非節化でもあり、文全体の中では従属節が主節に格上げされて（＝主節化）、従属節が存在しないことになり（＝従属節消去）、複文であったものが単文となる（＝単文化）という、やや複雑な変化でもある。本論では、これを簡単に《非節化》と称するが、非節化は文法化の一側面でもあり、単文化と表裏を成す現象でもある。

非節化が見られるのは、「こと」のように形式名詞に解されるものが関わっている場合が多いが、それがすべてではない。ほかにも、以下のような例が見られる。

(11) 期日までに論文を提出しなければならない。

(12) 申込書は提出しなくてもよい。

³ Lehmann(1988:193)では、従属節がより名詞句に近づくことをdesentencializationと呼んでいる。これは、文でなくなるという変化を指し、Sandra decided that she would not go to the meeting. が Sandra decided not to go to the meeting. に転じて意味はほとんど変わらないが、前者の下線部が明確に節の性質を持っているのに対して、後者の下線部は動詞が定動詞でないなど節でない（あるいは節としての性質が減っている）と見ることができる。また、We are waiting for John to arrive. が We are waiting for John's arriving. さらに We are waiting for John's arrival. と転じる場合、下線部はより名詞性が強まっている。日本語に関しても「私たちは太郎が帰国するのを待つ」と「私たちは太郎の帰国を待つ」では、意味は大きく違わないが、下線部は前者よりも後者の方が文の性質を失い、名詞句の性質が強くなっている。Lehmann(1988)では異なる例を用いているが、これらの変異をdesentencializationと呼ぶ。これはそのまま「脱文化」「非文化」のように訳しても誤解を招く可能性があること、また、従属節の変異を議論していることもあり、本論ではそのまま非節化(declausalization)という用語を用いる。desentencializationもdeclausalizationも全体として節減少である点では同じである。

- (13) 期日までに申込書を提出すればいい。
- (14) 太郎は委員会に出席しないかもしれない。
- (15) この本を読んでみたらどうですか？

これらの下線部は形式名詞を含まないが、いずれも接続助詞を含み、そのあとに述部が後続するかたちをとっている。形式論的には、(11)は「明日までに論文を提出しなければ」が従属節であり、(12)は「申込書は提出しなくても」が、(13)は「期日までに申込書を提出すれば」が、(14)は「太郎は委員会に出席しないかも」が、(15)は「この本を読んでみたら」が従属節である。それぞれの文において、これら以外の部分が主節であるが、(11)の「ならない」と(14)の「しれない」は、「どうにもならない」のように語句を補うか、「事態が立ちゆかない」「わからない」のように言い換えなければ、意味がとりにくい。単独で意味がとりにくいということは、助動詞としての統合が進み、自立性を喪失したことの1つの現れと見ることができる（尺度A）。ほかにも、これらは本来的に主節であるはずの後続部を省略して用いることが可能なものが含まれている（尺度B）。

- (16) 期日までに論文を提出しなければ。
- (17) ??? 申込書は提出しなくても。
- (18) * 期日までに申込書を提出すれば。
- (19) 太郎は委員会に出席しないかも。
- (20) この本を読んでみたら？

これらは省略されることで文体レベルが下がるため、口語体で主に用いられる。(17)のような言い方は「そんなに怒らなくても」のような形では成立するが、(17)をそのまま(12)の意には解しにくい。(18)は後続部がないと(20)に近い意味の「提出すればどう？」のような解釈が優勢となり、(13)の意には解釈されない。

後続部の自立性は、先行する従属節部と後続部のあいだに、副詞や感動詞⁴などの別の要素を置くことができるかどうかでも確認できる（尺度C）。これは、加藤(2007)に言う《弱境界》を含むかどうかの検証と同じである。

- (21) * 期日までに論文を提出しなければ、必ず、ならない。
- (22) 申込書は提出しなくても、たぶん、よい。
- (23) 期日までに申込書を提出すれば、たぶん、いい。
- (24) * 太郎は委員会に出席しないかも、もしかしたら、しれない。
- (25) ??? この本を読んでみたら、例えば、どうですか？

⁴ 感動詞は伝統文法の品詞区分での名称で、間投詞や談話標識、あるいは、フィラーと呼ばれるものを広く含む。

以上の観察をまとめると、以下ようになる。3つの尺度のうち、AとCは成立しない方が文法化が進んでいると見られるが、Bは逆に成立した方が文法化が進んでいると見られる。評価の向きが異なるものが混在してわかりにくいので、文法化が進んでいるものを1とし、そうでないものを0として、参考点方式で示しておく。ここでも3つの尺度以外の尺度がないというわけではなく、また、3つの尺度の重みが等しいという保証もないので、比較をわかりやすくするための便宜上の取り扱いで、あくまで参考評価に過ぎないことを断っておく。

	尺度A	尺度B	尺度C	合計
なければならない	×(1)	○(1)	×(1)	3
てもいい	○(0)	△(0.5)	○(0)	0.5
ればいい	○(0)	×(0)	○(0)	0
かもしれない	×(1)	○(1)	×(1)	3
たらどう（です）か？	○(0)	○(1)	△(0.5)	1.5

ここでの参考点を見る限り、「なければならない」と「かもしれない」は、文法化の度合いが高く⁵、「てもいい」と「すればいい」は低い。「たらどう（です）か？」は、その中間ということになるが、他がモダリティ助動詞に分類できるのに対して、これのみが発話内力(illocutionary force)を明確に持っており、判断を表すよりも勧奨を表すことが多いので、ここで行っているような単純な分類にはなじまないかもしれない。ただし、文法化しているかどうかは離散的な特性ではなく、連続的に捉えるべきものであることは確認できる。

重要なことは、文法化が進むことで、本来の主節が主節とはみなされなくなるという点では、形式名詞を含む場合と同じだということである。形式名詞を含む場合は、従属節がそのまま主節に入れ替わるが、ここで検討したタイプのものは、本来の従属節の一部と主節の全体を含む部分が助動詞相当の機能単位となっている点異なる。従属節の一部を含む場合、接続形は、未然形・連用形・仮定形・終止形などさまざまである。このうち、終止形に承接する「かもしれない」は、いわば命題に付いていると見ることでできるものであり、「するかもしれない」と「したかもしれない」のように、いわゆるテンス分化が可能であって、加藤(2007)に言う《強境界》があると言うことができる。

⁵ 加藤(2006)では、この2つを「モダリティ助動詞」に分類している。高橋(2003)では、扱いを保留されている一群に含まれる。

3. 連体修飾節を含むタイプの機能単位

形式名詞を含まないタイプの文法化が連続的と考えられること、そのための尺度がいくつか想定できることを前節で見たが、形式名詞を含むタイプの場合はどうか。一般に連体修飾では、ガ格をノ格に置き換え可能なガ・ノ交替が見られることは知られている。「雨が降る日」を「雨の降る日」のように変えられるかどうかを、ここでは1つの基準として用いる。

- (26) 花子 {が / の} 知らない事実がある。
- (27) 誰もが知っているようなことを、博識な花子が知らなかったことがある。
- (28) * 誰もが知っているようなことを、博識な花子の知らなかったことがある。

これらはいずれも「事実」「こと」を主名詞とする連体修飾節になっているが、(26)は「(その) 事実を花子が知らない」という文から関係節構造をつくったものであり、寺村(1982)などに言う、いわゆる「内の関係」である。一方、(27)(28)は「外の関係(内容補充型)」であり、英語などで同格の *that* 節をとるタイプのものに相当する。後者は「こと」が形式名詞として用いられ、「ことがある」が文法化することで助動詞相当の機能単位になっている。興味深いのは、この場合、標準語では、ガ／ノ交替が許されないことである⁶。このことは、連体修飾という性質が失われているからだと考えれば、単純で一貫性ある説明が可能である。

形式名詞「よう」「はず」からつくられた「ようだ」「はずだ」は、更に文法化の度合いが高く、助動詞としての特性が確立しているので、やはり、ガ／ノ交替はできない。

- (29) 次の大会では太郎 {が / *の} 優勝するはずだ。
- (30) 明日は雨 {が / *の} 降るようだ。

これは「ことになっている」「ことにしている」「ものだ」でも同様である。

- (31) 明日の研究会の司会は太郎 {が / *の} 引き受けてくれることになっている。

⁶ 肥筑方言をはじめとする九州方言では、主節においてもガ格をノ格にして成立することがある。この種の方言では、ガ／ノ交替をテストに用いることはできないであろう。東京方言をはじめとする多くの方言では、連体修飾節でしかガ／ノ交替が許容されないので、この種のテストが成立する。

- (32) うちの研究室では、外部からの問い合わせに助教 {が / *の} 答えることにしている。

実は、これらの文では、ガ格ではなく、主題化してハを使うのが一般的で、ガ格を使うと排他解釈になるので、中立的な意味でテストする形にはなりにくいという問題もある。しかも、ハを用いた場合、連体修飾節から離脱していると考えるのが自然なので、スコープの問題もあり、このテストは参考にとどめておきたい（当面、尺度 D としておく）。

「ことがある」を文法化された 1 つの助動詞として扱うべきかについては、統合度の問題も考えなければならない。

- (33) 花子は宝くじにあたったことが、かつて一度だけ、ある。

- (34) 花子は宝くじに当たったこと {も / は / すら} ある。

「ことがある」は、弱境界を含み、(33)のように境界部に副詞的要素を介在させたり、(34)のように境界部に副助詞を付加させたりできる。「が」は「は・も・すら」などを付加すると消去される（脚注 7 参照）が、いずれにせよ、弱境界という明確な切れ目を内部に含むことが確認できる。このことは、複合助動詞が、機能的には全体が 1 つの単位であるにも関わらず、形態論的には完全に統合されていないことを示している。

益岡(2007:85-108)では、「わけだ」「ことだ」「ものだ」「のだ」を説明のモデルティを担う形式としてまとめて論じている。「の」を益岡.2007.のように形式名詞に含めるかどうかは別にして、これらは、形式内部に境界を持たず、(33)のように別の要素の介在を許すわけではない。境界を含まない形式の場合、別の要素が介在可能かどうかを考える必要がないので、ここでは境界を含むかどうかを尺度 E として立て、境界を含むものについて境界部への多要素の介在が可能かどうかを尺度 e として検証する手順をとる。

もう 1 点は、格助詞を含む場合、(34)のようにそこに「も」「は」「すら」などの副助詞が挿入可能かどうかということである⁷。これも格助詞を含むかどうかという尺度 F を立て、格助詞を含む場合に副助詞（とりたて詞）が挿入可能かどうかという尺度 f を検証するという手順をとる。

⁷ ここで「挿入」と表現しているのは、「が+は」という助詞連続が、表層において「が」が消去されて「は」だけが残るという形式的手順を想定しているからである。一般に、「は」は格助詞にひろく後接可能だが、ガ格とヲ格の場合は、「がは」「をは」は形式として許容されず、「は」だけになって表層にあらわれる。見方を変えれば、「は」「も」に置換されると記述することも可能である。ただし、ニ格以下では、「には」「にも」の形式も可能であり、「をも」「をすら」もあり得るので、ここでは格助詞の直後に挿入したと考えておきたい。九州方言や東北方言で「を+は」が「ば」に置換される現象も同じように考えることができるだろう。

「ことがある」は上で見たように尺度 *e* も尺度 *f* も満たす。では、(31)(32)で見た「ことになる・なっている」「ことにする・している」の場合はどうだろうか。

- (35) 副指導教員がサインしてもよいことにもなっている。
 (36) 講演の依頼は断ることに、とりあえず、している。

これらは、いずれも尺度 *e, f* を満たす。ここで見たものを整理しておこう。

	尺度C	尺度E	尺度 <i>e</i>	尺度F	尺度 <i>f</i>
のだ	×(1)	×	—	×	—
ものだ	×(1)	×	—	×	—
ことだ	×(1)	×	—	×	—
わけだ	×(1)	×	—	×	—
ことがある	×(1)	○	○	○	○
ことにしている	×(1)	○	○	○	○
ことになっている	×(1)	○	○	○	○

この表を見ると、連体修飾節を含む形式は、大きく2つに分けられることがわかる。「のだ・ものだ・ことだ・わけだ」をA群、それ以外をB群と便宜的に呼び分けておくことにしよう。ここでは、尺度Cが成立しない方が、助動詞としての機能性が強いと評価されるが、これは特にA群とB群で違いが見られない。

尺度E, F をクリアしない場合は、そもそも尺度 *e, f* は問えない（このため、表では一で表示している）が、一方で、尺度E, F をクリアしているものは尺度 *e, f* をクリアしており、形態論的な特徴にだけ着目すれば区分が可能である。よって、以下では、尺度 *e* は尺度Eに、尺度 *f* は尺度Fに統合する。

問題は、「ことだ」と「ことがある」「ことにする」「ことになる」など、いずれも「こと」という同一の形式名詞を含む機能形式をどう扱うかということである。

- (37) 太郎は参加しないということだ。
 (38) 太郎は参加しないということにする。
 (39) 太郎は参加しないということになる。

本論では、「ことだ」と「ことにする」「ことになる」に派生関係があるものとして扱う。「～（という）ことだ」は、「A とはB ということだ」のように説明のモダリティで用いられる（益岡(2007)ほかを参照）が、「～ということにする」「～ということになる」では「という」の介在で意味が変わることはなく、前者

は「ある事態を意志的に現出させる」という意味で、後者は「ある事態が非意志的に現出する」という意味である。前者は、意志性・他動性が読み込まれ、決断の意にもなるが、後者は、非意志性・非他動性が読み込まれ、事態の変化のみを客観的に表現する。

- (40) 無理な注文は引き受けないことだ。
- (41) 無理な注文は引き受けないことにする。
- (42) 無理な注文は引き受けないことになる。

ただし、(40)は中立的な判断ではなく、当為判断になり、「～方がいい」「～べきだ」の意に解される（このとき「という」は介在できない）。特に文脈がなければ、(41)は決断と意思表示に解され、(42)は見込みを述べる認識モダリティに相当するものに解される。モダリティの意味というものは一般に多様で、なかなか単一の意味にしばって記述しにくいものではある。ただ、この「ことだ」という形式では、「Aは～することだ」のAにあたる「ことだ」と呼応する要素が表層にないとき「重要なこと」「必要なこと」の意がAとして読み込まれることが考えられる。というのは、そもそも、「早く起きること」「忘れ物をしないこと」のように、厳守事項や規則にあたるものを箇条書きふうに列挙する用法が想定されているからである。

規則や必要事項という解釈が繰り返されることで語用論的な強化が生じ、その意味がモダリティ用法を形成したと通時的には考えられるが、詳しい議論は機会を改めたい。ここでは「ことだ」という属性叙述（非時間表現）の無標の意味を基盤として、「ことに」という連用形式に意志性・他動性の「する」がついて「ことにする」が派生し、同じく非意志性・非他動性の「なる」がついて「ことになる」が派生したものとする。つまり、「ことだ」とその派生形「ことにする」「ことになる」を本論では機能的に一括したい。ただし、「ことにする」「ことになる」はいずれも弱境界を含んでいる点で「ことだ」とは異なる。

「のだ」「わけだ」「ものだ」は、同じように「のにする・のになる」「わけにする・わけになる」「ものにする・ものになる」という形式を機能的な単位として派生させてはいない。よって、形式名詞を含むもののなかでは「ことだ」のみが派生形式を持っていることになる。同じような状況は、一般名詞でも見られる。

4. 有派生タイプと一般名詞の文法化

前節での観察は、形式名詞Xについて、無標叙述形式で始まる文法化がさらに「Xになる」「Xにする」という動詞述語での機能形式を派生させているかどうか分布の違いが見られることを確認した。

無標叙述形式		有標叙述形式
Xだ	→	Xになる（無意志的・非他動的）
属性叙述形式で無標の解釈では「無時間」的意味。		Xにする（意志的・他動的）
		動詞述語の形をとり、事象叙述形式で「時間」的解釈となる。

無標の叙述形式は、いわゆる名詞述語文と同じ形で属性叙述表現と解され、無時間的な意味になるのが普通だが、時間の副詞句などを共起させることで、時間的な意味にもなりうる。ここから派生される形式は、動詞述語文の形をとり、一般に事情叙述に解釈できる時間的な表現になるが、これも文脈によっては無時間的な解釈が可能である。ここで言う「無時間的」とは、時間軸の中に位置づけた叙述ではないことを指しているが、日本語の場合、「夏は暑い」「氷は冷たい」など、形容詞の非タ形は無時間的な表現になっており、名詞述語文や形容詞述語文は、非タ形で用いられると、特定時に成立する事象ではなく、成立する時間や時点というテンスの制約から自由な属性叙述になる。動詞述語文の場合は、未来の事象を叙述する時間的な表現でなければ、習慣的な反復事象の叙述となり、時間性が希薄になって、より属性叙述に近づく。

前節で見た派生のある「ことだ」を有派生の α 型とし、「ものだ」「わけだ」「のだ」など派生のないものを無派生の β 型と便宜上呼び分けることにする。管見の限り、これまで複合辞、特に複合助動詞をこの種のタイプで分類することはほとんど行われていないようである。「こと」や「もの」は形式名詞以外にも、一般名詞に用いることがあるが、形式名詞にのみ用いる「はず」「よう」などは複合助動詞の用法がすでに確立していると見ることができる。

- (43) 太郎は既に新大阪駅に到着している筈 {だ / *にする / *になる⁸}。
 (44) 花子の遅刻は電車のダイヤが乱れた為 {だ / *にする / *になる}

以上からわかるように、「はず」と「ため」は有標叙述に用いない β 型である。一方、「ようだ」は以下に見るように、有標叙述に派生することのできる α 型である。

- (45) 花子が来春学会発表するようだ。

⁸ 「はずにする」が明らかに用いない形であるのに対して、「はずになる」の不適合性がそれほど明白でないと判断する人もあるようだ。これは「9時に東京駅を発ったのなら、昼過ぎには新大阪に着いているはず(だ)」ということになる」の意の縮約表現としての「はずになる」が口語の破調として聞かれうることが判断に干渉しているためだとも考え得る。(44)でも同じように、「～乱れたため(だ)」ということになる」の縮約が干渉している可能性がある。しかし、これらは単独では適格だと認めにくいものでもある。

- (46) 花子が来春学会発表するようにする。
 (47) 花子が来春学会発表するようになる。

通常、「ようだ」は証拠性のある認識を表すモダリティに用い、「Xだ」の活用として考えるなら、「ような」と「ように」という連体修飾形式と連用修飾形式を考えるのが普通であろう。前田(2006)では、ここで見た「ようにする」「ようになる」を変化構文として、「ようだ」から従属節を導く「ように」が派生し、「ように」がその用法の中で思考内容→命令内容→結果目的内容と派生していった結果、最終的に得られるものの一つに位置づけられている。

「ようにする」「ようになる」の場合は、認識モダリティではなく、変化を意図性と非意図性から叙述している点であるが、非意図的叙述はときに予測と解されることも多い。興味深いのは、(46)のように「ようにする」に先行する節が非タ形有的时候には、そのことを実現すべきことと意図して働きかけるという意味になるのに対して、タ形の場合は(48)のように実際は事実でないことを事実であるかのように働きかける（簡単に言えば、偽装する）という意味になる点である。

- (48) 花子が来春学会発表したようにする。
 (49) パソコンが突然壊れたようになる。

タ形の従属節が「ようになる」をとるのは、実際はそうではないがそう思わせるような類似の事態になるという意味のときで、(49)は「実際には壊れていない」という推意を伴うのが普通である。前田(2006)は類似事態の用法を派生のプロセスに含めていないが、これは用法の記述と派生の説明だけではなく、「する・なる」のような軽動詞の代わりに語彙的な一般動詞を用いた場合の制約も含めて、考えるべき複雑な現象でもあるため、機会を改めて論じたい。

さて、形式名詞「こと」は、「ことだ」とその派生「ことになる」「ことにする」のほかに、別系列として「ことがある」という機能形式を認めることができた。この形式は、連体修飾節がタ形の場合、過去における経験や記録的事実の存在を意味するが、非タ形の場合、以下のように、頻度（一定期間内での生起の可能性）の成立を意味する。

- (50) 次郎は温泉に行くことがある。

この「ことがある」は、「ときがある」「場合がある」などでも近い意味を表せる。また、従属節がタ形になる「富士山に登頂したことがある」における「ことがある」は「経験がある」でもほぼ置き換え可能である。これらは、形式名詞と一般名詞が paradigmatic な関係をなしているわけだが、形式名詞のなかには形

式名詞にしか用いないものと形式名詞と一般名詞の双方に用いるものがある。「とき」は後者であり、「はず」「よう」「ため」などは前者である。

形式名詞と一般名詞の置き換え以外にも、連体修飾節を従属節にとらない以下の(51)のような場合でも、(52)のような置き換えができる。

- (51) 花子は小説家になれないかもしれない。
 (52) 花子は小説家になれない {可能性 / おそれ} がある。

「かもしれない」は後で言及するように、本来的には「知れない」が主節であり、非節化によって助動詞化したものと言えるが、ここでは英語の *may* や *can* に相当する一つの助動詞と考えよう。「かもしれない」に先行する部分は、終止形で終わる文であり、いわば「かもしれない」は命題についていると言うことができる。同じような意味を表す(52)は「可能性」「おそれ」という名詞を修飾する連体修飾の従属節についている。なお、「可能性がある」「おそれがある」は「可能性だ」「おそれだ」とは用いないので、派生の有無を考慮する必要はない。

他にも、「感じだ」「様子だ」などが「ようだ」「みたいだ」等と同じ位置と意味で用いられることがある。このため(53)と(54)は近い意味になる。(53)のほうが、外形的に認知された状況にあることの推定に重点がある点が異なるが、同じように文法化のプロセスにあると見てよいだろう。しかし、(53)は語彙性もかなり残しており、文法化が進んで助動詞形式のカテゴリーに達していると見てよい(54)とは異なる。このことは、(55)の「～する感じだ」の据わりが悪く、「～しそうな感じだ」あるいは「～しそうだ」のほうが据わりがよいという判断とも合致する。

- (53) 太郎は論文が書き上がらず困っている {感じ / 様子} だ。
 (54) 太郎は論文が書き上がらず困っている {ようだ / みたいだ}。
 (55) この建物はすぐにでも倒壊する感じだ。

「感じだ」に対して「感じにする」「感じになる」という派生形が存在するが、それとは別に「感じがある」「感じがする」という表現もある。「感じがある」は相対的に客観的な属性叙述で、「Aに(は)～感じがある」という構文になり、Aが「～感じ」を所有する所有構文のかたちをとる((56)を参照)。一方、「～感じがする」は主観的判断の叙述に傾き((57)を参照)、「～と思われる・～と感じられる」といった自発判断に相当する。これは「～気がする」にも同じ説明が当てはまる。

- (56) 花子には、どんな問題にもひるまず取り組む感じがある。
 (57) 次郎の負担が大きくなる感じがする。

他にも「～する義務がある」「～する必要がある」などの言い方があり、これも「～しなければならない」などのモダリティ表現に置き換え可能な場合がある。

事前に文案を検討する {必要 / 義務} がある。

事前に文案を検討しなければならない。

(58)と(59)は意味が近く、ほぼ同義と見てよい場合もあるが、(58)で「義務」を用いると、義務を課される人物が明確化し、「必要」を用いると当該行為そのものの必要性が前景化して、その行為をすべき主体は後景化するように感じられる。これに対して(59)は主体が明示されなければ前景化されないという点ではやや「必要がある」に近いかもしれない。また(59)は「なければ」の直前は活用語の未然形、N+ダならN+デの形式になるので、テンス辞の「た」は介在の余地がない。この制約は(58)でも同様にかかる。

(58) * 事前に文案を検討した {必要 / 義務} がある。

名詞修飾の節がタ形になってはいけないという制約は形態論的にはかかっていないと考えられるので、(60)が不適格になるのは意味論的な制約に背馳しているからだと考えべきだろう。

このように一般名詞を用いた機能形式は、全体に「Nがある」か「Nだ」の形をしており、後者は「Nにする」「Nになる」という派生形を持つ場合がある。また、これとは別に「Nがする」という形もあるが、この場合は一般名詞は感覚や心理を表す名詞に限定され、その中で文法化の度合いが高いものは「気」「感じ」など一部の名詞に限られる。

(59) 変な {感じ / におい / 味 / 音} がする。

(60) 次郎は悪事に手を染めている {感じ / ?におい / *味 / *音} がする。

感覚を表す表現として(61)はいずれも成立するが、「なんとなく感じられる」というモダリティ的な意味で使えるのは(62)で見ると「感じ」と「におい」だけである。(62)では「におい」は嗅覚での近くの意味では成立しにくい、が、「感じ」に近い意味に意味漂白が生じていれば、あるいは、比喩化していれば、成立する。しかし、味覚や聴覚については同じことが見られない。

本論では、整理の便宜のために、存在動詞を用いる「Nがある」のタイプをⅠ型、コピュラを用いる「Nだ」のタイプをⅡ型、「Nがする」のタイプをⅢ型とする。これまでに見たように、Ⅱ型には派生形式を持つαタイプと無派生のβタイプがある。Ⅰ型とⅡ型には形式名詞を用いるもの以外に一般名詞を用いるもの

があり、Ⅲ型は形式名詞を用いるものではなく一般名詞を用いるものだけに限られる。その他をⅣ型とする。

実は、これら以外の機能形式の形態タイプも若干見られ、否定表現のかたちと対応も見えておく必要があるが、ここまで見たものをタイプ別に整理しておこう。

	名詞種別	派生関係	例文
Ⅰ型	形式名詞		(63)～(67)
	一般名詞		(68)～(72)
Ⅱ型	形式名詞	α 型	(73)～(74)
		β 型	(75)～(80)
	一般名詞	α 型	(81)～(83)
		β 型	(84)～(89)
Ⅲ型	一般名詞		(90)～(92)
Ⅳ型	形式名詞・一般名詞		(93)

- (61) 沖縄に行ったことがある。(経験)
 (62) エステに行くことがある。(頻度)
 (63) 何も釣れないときがある。(頻度)
 (64) 散り際の桜には切ないものがある。(程度性)
 (65) 納得できないところがある。(部分性)
 (66) 彼女は不合格になる可能性がある。
 (67) 書類が受理されない {場合 / ケース} がある。
 (68) 停学になった {経験 / 過去} がある。
 (69) 大学院に進学した理由がある。
 (70) 納得がいかない {点 / 部分 / 箇所} がある。
 (71) 体調の悪いときはよく寝ることだ。
 (72) 太郎は言語学を専攻するようだ。
 (73) 赤ん坊はなくものだ。
 (74) なるほど君が緊張するわけだ。
 (75) 次郎ハ何も知らないのだ。
 (76) 太郎は合格するはずだ。
 (77) 君が行くべきだ。
 (78) 彼女は行くみたいだ。

Ⅱ型形式名詞 β 型に含めた(79)の「べきだ」の「べき」と(80)の「みたいだ」の「みたい」は厳密には形式名詞ではない。特に「べき」は「べし」の連体形であり、連体修飾のときはそのまま「～するべきN」のように用いる。「みたい」は

形容詞との形態的類似性から「みたく」のような連用形を俗調ないし方言形で見ることがあるが、活用上は最も齟齬が小さいと見て、以上のように分類した。

- (79) 彼の話し方は人を諭している感じだ。
- (80) 彼女は進学するつもりだ。
- (81) 与党としては野党案を受け入れた形だ。
- (82) 首相は総選挙に打って出る構えだ。
- (83) 彼は就職する気だ。
- (84) 来週は天気がよくなる見込みだ。
- (85) 午後から雨が降る予報だ。
- (86) 学部を改組する予定だ。
- (87) 幹事長は打開策を模索している模様だ。
- (88) 彼女は何か心に秘めている感じがする。
- (89) この事件は、A氏の背後に黒幕がいるにおいがする。
- (90) 今回のことに関して彼は全く何も知らない気がする。
- (91) 朝ご飯は食べた方がいい。

ここではⅡ型の一般名詞に α 型と β 型を分けている。「Xだ」から「Xになる」「Xにする」が派生するなら「有派生タイプ」として α 型に含めることを基準にしているが、(85)などは「就職する気になる」のように「Xになる」は派生するが、「就職する気にする」という「Xにする」の形式の認定は難しい。(85)の「彼は」はガ格の主題化と見られるが、「Xにする」の派生形は「彼を就職する気にさせる」としないと現れない⁹。つまり、「Xになる」があって「Xにする」は成立しないと見られるのである。これは「AがBだ」と「AがBになる」が格シフトなどを伴わないのに対して、「(Cが)AをBにする」では他動化ないし使動化と見てよい格シフト変更と項の追加が見られ、構造の変化が大きいためではないか思われるが、この点を論証するにはもっと多くの用例を子細に検討しなければならないので、管見の範囲で、 α 型と β 型のあいだに「Xになる」という派生形のみを持つ β' 型があることを指摘するにとどめたい。

もう1点見ておくべきことがある。否定のかたちである。

- (92) 彼は来るはずだ。
- (93) ??? 彼は来るはずでない

⁹ このため、「彼を就職する気にする」を適格なものと判断する人も見られる。こうした判断は、「気にさせる」の縮約形と見るべきか、「～を気にする」など類似する形式の存在が判断に影響して生じると考えるべきなのか、簡単に結論を導きにくい。しかし、本論では、これは干渉の結果、判断がゆれたものと見ることにはしたい。すなわち、「彼を就職する気にさせる」が適格で、「彼を就職する気にする」は文法的には不適格と扱う。

- (94) 彼は来るはずがない。
- (95) 彼女が小説家になるわけだ。
- (96) ??? 彼女が小説家になるわけでない。
- (97) 彼女が小説家になるわけがない。

「Xだ」の単純な否定形式「Xでない」でなく「Xがない」のほうが自然だという点では「はず」も「わけ」も同じである。(95)の「はずでない」は「はずではない・はずじゃない」ならば成立するが、このままでは自然でない。(98)も「なるわけではない」ならば成立するが、これらは「は」の介在によって否定焦点化が見られ、「は」の有無で意味がどう異なるかも検証する必要があるので、機会を改めて考察する。

5. 連体修飾を含まない文法化のタイプの整理

形式名詞や一般名詞などが後続の要素とともに文法化して、本来連体修飾の従属節であったものが、主節化するタイプをやや細かく整理して見てきた。これ以外にも2節で見たように、連体修飾節と名詞を軸に文法化するのとは異なるタイプもある。ここではそれを節（終止形）につくタイプ（V型）と活用形につくタイプ（VI型）に分けて整理しておきたい。後者は、活用形といっても、連体修飾はないタイプなので、連体形はなく、V型と区分するので、終止形も除外する。加えて、命令形も接続の活用形と現代語では考える必要がないので、除外することになり、未然形と連用形と仮定形で分ければよいことになる。

- (98) 今年の夏は猛暑になるという。
- (99) 今年の夏は猛暑になるって（いう）。
- (100) 太郎は合格するかもしれない。
- (101) 太郎は合格するやもしれぬ。
- (102) 教えてくれるといい。
- (103) 休まなければならない。
- (104) 休まざるを得ない。
- (105) 休んでもよい。
- (106) 休んだらいい。
- (107) 休めばいい。
- (108) 教えてくれればいい。

	活用種別等	例文
V型	引用形タイプ	(100)～(101)
	疑問辞タイプ	(102)～(103)
	仮定節タイプ	(104)
VI型	未然形	(105)～(106)
	連用形	(107)～(108)
	仮定形	(109)～(110)

V型の引用形タイプは後ろに「話だ」「噂だ」などを続けることが可能で、この場合は、形式上Ⅱ型に分類できる。引用辞トやッテの前には被引用表現が置かれるので、統語形態論的には制約がなく、意味的な制約だけが与えられる。「早く結論を出せよという発言」では引用辞トの前に動詞命令形や終助詞ヨが用いられているが、「早く結論を出すという方針」を「早く結論を出せよという方針」は受容度がひどく低い。これは、引用辞トの前が特定の発話をそのまま引用している（写像度の高い引用を行う）ことが許されると考えれば、統語形態論的なレベルでの制約ではなく、「方針」など特定の発話の直接的な引用と整合しない名詞句では不自然になるという意味論的なレベルでの制約と考えられる。

(102)(105)(107)(108)などは接続助詞までを残して、後続部を消去しても通じるだけの文法化が進んでいることはさきに見たとおりである。接続助詞を含むこれらは、節と節のあいだの弱境界（節境界＝弱境界）を含むことが重要な特徴になっている。

VI型は、活用形が指定されているのでテンス辞が介在する余地はないが、以下のように、ボイス辞・アスペクト辞・否定辞などは介在させることが可能である。

- (109) 休ませなければならない。（使動辞の介在）
 (110) 休んでいてもいい。（アスペクト辞の介在）
 (111) 休まなければいい。（否定辞の介在）

VI型は統語要素の介在は可能だが、テンス分化が許されない（タ形にできない）ので、強境界を形式の開始部に持つV型とは異なり、形式の開始部には加藤(2007)で言う強境界も弱境界も存在しないことになる。

つまり、V型「かもしれない」とVI型「なければならない」について、対照的に示すと以下ようになる（強境界を||で、弱境界を|で示す）。

- (112) V型 ||かも|しれない||
 (113) VI型 なければ|ならない||

強境界が冒頭部にあるかどうかはテンス分化が可能かどうかの違いになる。

6. 日本語の類型的特性と文法化と非節化

最初にも述べたように、日本語は主要部右方型の言語で、修飾するものが先（＝左）に来て、修飾されるものが後（＝右）に来るのが原則である。ただ、これは語彙性のある要素の関係で、句と句、節と節、あるいは、節と句などの場合（ここでは「句」は「語」でもよい）の場合である。

この場合は、本来、右側にあるものが構造的にも意味的にも主たる要素として主要部になっていると考えられる。しかし、形式名詞が主要部になる場合、意味的には左方で修飾している連体修飾の従属節のほうが、情動的に重要であり、構造上も長いなど偏りがあって、形式名詞は文法的な要素に近づく。そして、これは、一般名詞でも比較的意味的に特殊でない場合は生じる。

- (114) 太郎が音素の概念を理解していないのが問題なのだ。
 (115) 太郎が音素の概念を理解していないことが問題なのだ。
 (116) 太郎が音素の概念を理解していない事実が問題なのだ。

これらはいずれも下線部が連体修飾の従属節で「の」「こと」「事実」がそれに続いている。「の」は国文法では準体助詞であるが、益岡(2007)のように形式名詞に含める立場もある。機能的には、(115)の「こと」と「の」は近いが、「こと」には形式名詞とは言えない例もあり、自立性という点でも両者は異なる。本論では、「の」は単なる機能辞の一種（名詞化辞）と捉えたい。(117)と(116)が意味的に近いことを重視すると、「こと」は語彙の意味を喪失しつつあり、下線部のほうが情報上具体的かつ重要であって、意味的な重心が構造上の主要部を主要部でない状態にする作用を果たしていると見ることができる。(118)における「事実」は語彙的な意味を失ってはいないが、語彙的な意味が背景化していることは確かであろう。これは、以下の原則をたてて考えることができる。

(117) 意味的重心の作用（形態構造に対する意味機能の優位原則）

連体従属節＋主要部名詞という構造において、意味的な重心が前者に置かれるとき主要部名詞は、意味的に背景化し、それに対応して、その統語構造上の役割が相対的に前景化することがある。この作用が強まると、主要部名詞は自立性が低下し、主要部としての特性も弱まる。

この原則について *semantics-over-morphology principle* を略して *SoM* 原理という略称を以下では暫定的に用いる。この原理は、おおまかな理解においては、意味の重心によって構造解釈が変わりうることであり、さらに、それが語彙的要素か

ら文法的要素（機能単位）への変化を起こす動機になっていると考えてよい。単純に言えば、構造に意味が優位的位置に置かれ、それが機能的な特化を促す作用を持つ、ということでもある。つまり、ここでの SoM 原理は、言語変化の 1 つの動力(drive)となる機能重点化であり、それによって形態論的な制約が徐々に弱まるという言語内的な変化だと考えている。しかし、SoM 原理は言語内的な変化の力や動機とは別に、研究者が言語を捉える研究手法に見られる傾向と考えることが可能である。つまり、研究者が言語現象を記述したり分析したりする際により機能重視や形態論軽視の姿勢や手法をとることはありうるが、これは意味論を形態論より上に位置づけてはいるものの、言語外の枠組み設定のことなので、ここでは両者を区別する¹⁰。

SoM 原理は言語において機能する動的な力というだけではなく、研究の枠組みとして主流になっていることの方が重大な影響力を持っていると思われる。例えば、I am going to attend the meeting. の本来の解釈は、I と am going が主部と述部で、to attend the meeting を副詞句とするものである。しかし、going の語彙的意味が後退し、be going to が機能単位となるとときには、[be going to]が助動詞と解釈され、本動詞（あるいは動詞主要部）が attend であると見なされる。このときは、本論で言うような非節化は起きていないが、境界部の移動（to の直前から to の直後へ）が生じており、主要部が主要部であることを停止し、主要部以外にその役割を譲るという変化が生じている。

また、日本語は長らく主要部右方型と分類されてきたが、これは助動詞類を除外して捉えたもので、主要部と補部という関係について助動詞類を含めて意味的に見ると、述部複合構造は必ずしも右方優位でない点も重要である。

(118) 食べ-させ-ていた-らしい-よ

述部複合では、語彙的な動詞が先頭に置かれ、それに後続するのは助動詞か助詞である。しかも、動詞の語彙性は構文形成上重要な特性であり、ボイスなど格シフトを含む構文特性を支配する統語要素は語彙的動詞の直後に置かれるのが重要な規則になっている。さらに、述部複合を階層的に記述することが多いことからわかるように、動詞から順に重要な要素が配され、任意の要素は単に付加されて行くだけであることが多い。つまり、語に機能的要素を付加して形成する述部複合では左方に主要部が置かれ、右方に補部などが置かれると見ることができるわけである。これは、意味的観点からは日本語が右方主要部型であり、機能的観点からは日本語が左方主要部型の言語であるということになる。つまり、意味

¹⁰ 必要があれば前者を言語内的なSoM原理、後者を言語外的なSoM原理などと呼んで区別したい。

と機能で構成原理の分裂が見られるのである。ここではこのことを(121)のように理解しておきたい。

(119) 日本語の構成原理の分裂性（意味的右方性と機能的左方性）

日本語は、語彙的要素など意味的な関係をなすものは主要部を右方に配する傾向が強いが、統語要素など機能的な関係をなすものは主要部を左方に配する傾向が強く、構成原理が異なっている。

便宜上、わかりやすいように「意味的右方性と機能的左方性の分裂」ということにすると、この分裂は、構成原理がそれぞれの分担を守って作用している限りは、分担の1つのありようでしかなく、問題にならない。しかし、意味が構造に優位に作用する(119)Semantics-over-Morphology 原理が関わると、分担関係は崩され、意味論が形態論を侵略するがごとく、意味の関係が形態論的な関係を抑制して主要部や主節を無化し、形骸化することになる。これが、《非節化》を可能にし、また、《非節化》を起こす大きな要因だと考えられるのである。

加藤(2007, 2009)などで言う《非節化》は第1節で言うB型などに生じるものであるが、端的に言えば、複文構造が単文構造になるような、節を一つ減ずるようなプロセスとすることができる。構造的には「Xがある」という主節とXを連体修飾する従属節を伴う「～するXがある」を見比べると、いずれも主節部分は同じはずであるが、(122)の下線部が頻度や生起可能性を述べる助動詞のような役割を持っている形式と見なされると、(122)は本来従属節であるはずの「たまにはお酒を飲む」が主節になり、「ことがある」は助動詞のように機能し始め、主節の一部たる「飲む」を主要部としてそれに付属する要素に降格し、単独で節を形成しているとは見なされなくなる。これが、節であることを停止してしまうと見て、ここで《非節化》と呼ぶプロセスにあたる。

(120) たまにはお酒を飲むことがある。

これは、「ことがある」という機能形式の誕生と見れば《文法化》ということもできる。ここでの機能単位は、おおむね助動詞に相当するものが多いので、助動詞化と言ってもよいだろう。また、本来「ことが」という主格名詞句と「ある」という動詞句からなるものが、1つの単位にまとまって単一の機能を持つという《統合化》でもあり、統合化は、構造的境界を背景化して意味的境界を実質的な境界にするプロセスと見ることもできる。(122)で言えば「ことが+ある」の「こと」に先行する節が付属している構造から、「お酒を+飲む」の「飲む」に「ことがある」が助動詞的に付属している解釈に転じるので、(123)から(124)への変化と記述することも可能である。つまり、非節化は切れ目の変更として見れば、構造の《異分節》でもある。

- (121) (たまにはお酒を飲む) ことが | ある
 (122) (たまには) お酒を | 飲む (ことがある)

節を形成しているものが助動詞になって節であることをやめれば、節の数は1つ減ることになる。この《節減少》は、複文を単文に変えるという《単文化》として象徴的に表すことができる。もちろん、従属節の中に従属節を含むような構造であれば、《節減少》があっても、分類上は複文のままかもしれない。しかし、(122)のような単純な構造では「ことがある」が主節でないとすれば、単文化したということができる。

以上のように形式名詞を含む場合が典型的な例であるが、「かもしれない」のようにどの部分が主節なのかわかりにくい例もある。「～かもしれない」の「知れない」は「わからない」という意味なので「～」の命題部分は本来ガ格でマークされて「～(かどう)かが知れない」という意味合いである。ここでは「か」が節に付くことで名詞化が生じているが、「の」と異なり「か」を名詞化辞として扱うことが少なく、「かもしれない」の統合性が高いため、これを主節と見ることは少ない。さらに「～すればいい」の場合、本来の構造では「いい」は対応する主格名詞句が存在せず、「いい」だけが主節で、それ以外は連用的な成分に過ぎない。しかし、「ればいい」の統合性が高まって「いい」が自立性と語彙性を失うことで、「ればいい」全体が助動詞のように見なされるわけである。

終わりに

語彙的な意味の後退が文法化と連れだって生じるのは、通言語学的に見ても、普遍性のある現象だろう。意味が構造に優位に立って、本来主節であるはずの形式が補部的な位置づけになる現象も条件が整えば、どの言語でも生じる可能性はある。たとえば、英語の *It looks that...* では、その本来の構造においては *It looks* が主節で *that* 節が従属節であるが、意味上 *It looks* は *Seemingly* などに置き換えられる場合もあるような副詞的な要素になっている。これは、*Looks* に省略されることからわかるように、機能単位化が進んでおり、意味的に重心のある *that* 節が主節に感じられるようになる。

ただ、語彙性を残しつつ文法化するなど、両者の拮抗する連続的な状況もあり、どういう条件下で非節化が生じやすいか、また、生じにくいかは、個別の形式を子細に観察して記述するところから始めなくてはならないだろう。また、今回提案した分類は、現象の記述に基づいているもので、《非節化＝文法化＝統合化＝節減少＝単文化》というプロセスという観点からは、また異なる分類が考えられる。このことは、いくつかの残された課題とともに、今後機会を作って詳しく論じたいと考えている。

参 考 文 献

- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京：ひつじ書房
- 加藤重広 (2006) 『日本語文法入門ハンドブック』 東京：研究社
- 加藤重広 (2007) 「日本語の述部構造と境界性」 『北海道大学文学研究科紀要』 122, pp.97-15
- 加藤重広 (2009) 「日本語の述部複合構造の境界性と非節化」 沈力・趙華敏（編）『漢日理論語言学研究（中日理論語言学論集）』 北京：学苑出版社, pp.31-37
- 加藤重広 (2010) 「日本語連体修飾表現の類型と特性」 上野善道監修『日本語研究の12章』 東京：明治書院 pp.151-164
- 高橋太郎(2003) 『動詞九章』 東京：ひつじ書房
- 寺村秀夫(1984) 『日本語のシンタクスと意味 I』 東京：くろしお出版
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』 東京：笠間書院
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』 東京：くろしお出版
- Lehmann, Christian (1988) "Towards a typology of clause linkage", Haiman, J. and Thompson, S. A. (eds) *Clause combining in grammar and discourse*, Amsterdam: John Benjamins pp.181-225